

公助の前に「自助」「共助」 防災活動 地域へ波及を



防災に関わる様々なニーズが並んだ。新聞紙とビニールを使った食器で食べるカレーライス。上自衛隊員や消防士といった専門家や有識者の体験や知識にもとづいた講話を聞いたほか、防災グッズのブース展示などで理解を深めた。

サバイバルクッキングの紹介では、新聞紙とビニール袋を活用した食器づくりを体験。つくった食器でカレーライスの昼食を取りながら、有事には限られた資材で、いかに衛生的な生活を保つかについて確認していた。

山辺里地区まちづくり協議会の川内健二さん(39)は「当地区ではこれまで、防災について考える機会がなかなかなかったが、地震後で住民の関心が高まったタイミングにこうした事業に参加できて、今後について考えるきっかけになった」と話していた。

いわふねJCC

一般社団法人いわふね青年会議所(齋藤広樹理事長)は、JCCは先月27日、村上農林環境改善センターで「持続可能な明日への防災事業」を延びる力自助共助の必要性を地域住民の防災意識を高め、知識を向上・共有し、自主防災組織などで使える防災活動のモデルを構築することなどを目的に企画されたこの事業には、会場となった山辺里地区関係者、市内まちづくり協議会などの団体関係者、住民など約100人が参加。陸

結成初の「市長杯」 13団体、233人が参加



和元年を節目に連盟を作り、さらなる選手強化を目指す」と話した。

大会結果は次の通り。園城選手のみ掲載。形は該当者なし。組手「幼児・小学1年男子」③山田健(修正会)「小学2年男子」①小林厚平(修正会)③小田夏輝(修正会)「小学5年男子」①齋藤瑛士(村上)②岡田斗夢(村上)「中学男子」①中野恵珠(村上)「高校・一般男子」①坂野伊吹(村上)「小学5年女子」①瀬賀美優(村上)③佐藤心美(村上)「小学6年女子」③遠山めい(修正会)



酒粕抹茶ブラウニー(銅賞) 酒粕香るチーズケーキ(銀賞) 酒粕アイス(金賞) 酒粕のロールケーキ 酒粕ラムレーズンのヨークシャータルト 酒粕レアチーズタルト 黒ゴマと酒粕のパウンドケーキ 酒粕の生キャラメル 生チョコレート

大洋酒造 × シェパティシエ専門学校

酒粕が魔法で変身

「Sakeスイーツ」コンテスト

新潟市のシェパティシエ専門学校で先月26日、「Sakeスイーツ」コンテストが開かれた。これは学校と県内企業等がコラボレーションし、学生が県産食材を使った新商品の開発、プレゼンテーションのむずかしさから学びながら、企業の発展に寄与したいとする取り組み。今回

回には村上市の大洋酒造でつくられる酒粕をテーマ食材とし、同校製菓製パン技術科製菓コースで学ぶ2年生24人と調理製菓技術科パティシエコースで学ぶ17人が参加し、10グループに分かれてエントリーした。

学生らは、日頃学んでいる技術や知識を生かし、また、若い世代ならではのアイデアでレシピを考案。酒粕独特の風味をどう取り扱うかに苦戦しながら、グループごとに個性

な〜む〜じ〜ぞ〜 かんかん 地蔵まつり



鐘をたたきながらお題目を唱える子どもたち=細工町地蔵堂

地蔵菩薩を祀る多くのほこらや地蔵堂で先月23日、地蔵様まつりが開かれ、訪れた多くの地域住民や観光客らが、江戸時代から伝わる夏の風物詩を楽しんだ。それぞれの地蔵さまでは、子どもらが「な〜む〜じ〜ぞ〜、かんかんかんの」の唱えに合わせ鐘をたたきながら心えていた。

村上大町の十輪寺(山岸)

秀瑛住職)では、本尊、火伏地蔵のご開帳とともに護摩祈禱が行われ、集まった住民や信者約100人が厳粛な行事に参加。護摩木に託した家内安全や、無病息災などを祈願し、訪れた人たちは、幻想的な風情を味わっていた。

また、小町、大町、上町の商店主らで作る中央商店街振興組合や村上地域まちづくり協議会が商店街や上町の町屋ひろば、土間中では多様なイベントを催し、園児らの「おじぞうさまめり絵展示」や獅子舞披露のほか、スタンブラリーやバルーンアートなどを開催。町なかが多く家族連れなどでにぎわっていた。

の光るスイーツを完成させていた。審査は、プロの洋菓子職人や地元関係者によって厳正に行われ、製菓製パン技術科1班の「酒粕アイス」が金賞を受賞。米にこだわりの酒粕をあしらった酒粕に合うしょうがを加えた大人も楽しめるアイスは、あえて酒粕の風味を生かしたものの、意見を出し合い、教員らのアドバイスを受けて完成までこぎ着けた努力が実った。

各賞の副賞には、成人となる卒業時に大洋酒造から祝いの酒が届くという粋な演出も。同社営業部の水上洋さんは「ゆ〜く〜は酒粕だけでなく、村上地域の食材に着目していただけたら、若い才能発掘のお手伝いができれば」としている。レシピは、同酒造ホームページで公開される。

写真提供：取材協力川俣史生さん

続 臥牛翁との問答 ②

文 阿部昌彦

百歳の短歌

翁 おぬし、読んでたであらう。六月二十四日「新潟日報」の歌壇に「伊東和信」先生の短歌が入選してあったぞ。それは、

・戦争とシベリア抑留過ぎきいま百歳を施設に想ふ

というので、「過去のつらい体験を回想し、今の生活に感謝しているのだろう」と選評が載ってあった。

男 選評の淡白なのが、少し不満でした。先ず「百歳」で短歌を詠まれている、これは希有で素晴らしいことでしょう。

翁 確かに。卒寿も過ぎれば「短歌」も縁遠くなるのが普通よ。

男 今年、豊栄短歌会、

・憂き事は忘却の彼方に捨て去りて希望明るく百まで生きむ

に出会いましたが、作者の「丸山盛二」さんは九十四歳それにかけて、同会の「山崎きよみ」さんが、

・辿りつく九十三歳の誕生日 大方忘れて今は至福ぞ

を発表されておられ、超え高年齢の作歌活動に敬服しておりましたが・・・

翁 伊東さんは、とりわけ素晴らしいお方じゃー! 県立村上中学校34回卒業で、大正8年生まれ、正に「百歳」でおられる。



翁 なかなか詳しいの。

男 それは、伊東先生の記憶力の優れておられるのは職場を共にした身で実感できます。秘かに「神田阿礼」と「又の名」でお呼びしていたくらいですから。

翁 「抑留」を苦む者は知らんが、ソ連が投降した日本兵士を、シベリアに送り、凍土の地で鉄道敷設に強制労働させた。その兵、五十万。劣悪な環境に栄養不良で、死者は五万人を越えた

男 「異国の丘」に「夢も寒がる、冷たかる」と歌われましたが、先生の記憶の中の歌詞に「タモイ、タモイ」といふ編みかたが、やってきました北の町ノコムソリスクタ日は落ちてノヤボンスキーの影法師の哀愁も切なく、心に響いて来ます。

翁 「抑留」の過酷さに加えて、最近「遺骨収集」に取り違えが発覚した。もう、戦後七十四年ぞ。

男 「文芸むらかみ」の先生の随筆には「夜間にはオルグによる政治教育」がなされたことありました。

・抑留のまま帰化せる兵というきびしき冬と声震え言つ

近藤 芳美

の「帰化」は想像を超える寒さの中での共産主義への帰服を詠んでいます。

翁 そうだな、そんな「洗脳」の厳しさも、伊東さんは凄いで、昭和二十三年五月にタモイされた。

男 伊東先生の「物に動じない」お姿の背後に「抑留」を経て辿り着かれた「温和」で「信念」に生きる日々が存在していたのだと敬服しております。その後、二回「日報歌壇」に作品を拝見いたしました。ご健康で「百歳の短歌」で人々をお導き下さいませよう!